JANAMEF
Japan-North America Medical Exchange Foundation
news

Vol. 50
2018.10

■発行年月日／平成30年10月25日
■編集／事務局
■発行／公益財団法人日米医学医療交流財団
〒113-0033 東京都文京区本郷3-27-12-6F
TEL: 03-6801-9777 FAX: 03-6801-9778
E-mail: info@janamef.jp
URL: http://www.janamef.jp

巻頭 Essay

日本版ホスピタリスト養成の一考察

公益財団法人日米医学医療交流財団理事／洛和会ヘルスケアシステム総長
松村理司（まつむらただし）

ごく最近、ニューオーリンズでの米国内科学会（American College of Physicians：以下、ACP）の年次学術総会でHonorary Fellowshipを授与されました。この称号は、「米国外の内科学会の会長ないし同等の資格があって、ACP会員でない者」と規約で定められています。

内科学会会長や国際内科学会会長ということになりますと、日本ではほぼ大学人です。私は卒後約45年になりますが、大学で働いたのは若き日の2年間だけです。授賞理由は、「多年にわたり米国式臨床教育経験者を招聘し、総合診療を主体とした卒後教育体制の構築に貢献した」というものです。「“大リーガー医”招聘」の試行が認められた次第です。

ACPの学会資料には、「歴史に浸りながら教育に没頭する」との文言がありました。学術総会自体の目的が「プライマリケア内科医・ホスピタリスト・サブスペシャリストに対する教育」であると明記され、また「過去100年の医学教育の実践」とも力強く謳われていました。「医学教育の重要性」を強調されますと、自身の異例の受賞にいささか納得すると同時に、総会の開催意義の彼我の差についても考えさせられました。

「落ち」のような事実があります。今回の学会長のJack Ende先生、支部長会議長のThomas Cooney先生は、ともに私どもが招聘した“大リーガー医”でした。「出来レース!?」という方向にではなく、「“大リーガー医”たちがACPの重鎮になっていること」に注目してください。“大リーガー医”の多くは、旧世代はアカデミック一般内科医、新世代はホスピタリストと呼ばれる方々です。ホスピタリストがすでに全米で5万人以上いるわけですから、そのリーダー格の方々がACPの重鎮なのは何ら不思議ではないのですね。

「“大リーガー医”招聘」を踏まえ、ホスピタリスト（病院総合医）養成に関わって約35年が経過します。うち前半の20年を236床の市立舞鶴市民病院で、後半の15年を500床を超える洛和会音羽病院で過ごしてきましたが、圧倒的に前者でやりやすかったのが実感です。総合診療教育は中小病院でかえって展開しやすく、大学病院を含め大病院での成功例が少ないのは、すでにこの道の共通認識です。

ところが、現在の米国ではこのような現象は見られません。その最大の理由は、大病院で内科系専門諸科の指導層がひしめき、当該専門能力発揮の様は日米同じなのに、その指導医層の内科全般にわたる基本的な臨床・教育能力に彼我の差がかなりあるからです。日本のほうが明らかに劣ります。

この点を日本の大学人になかなか実感してもらえないためもあり、始まったばかりの新専門医制度でも、内科系サブスペシャルティの前倒し傾向が目立つのは残念です。超高齢社会の内科への臨床的要請の一つは、多病・多死への総合力のはずだからです。

ともあれ、若い世代が縮かんではなりません。ホスピタリスト養成の至適な病院は国内に点在します。能力と機会に恵まれる向きは、是非米国臨床留学に挑戦を！JANAMEFがサポートいたします。

松村理司氏　主な経歴：

1974年京都大学医学部卒業。
京都大学結核胸部疾患研究所胸部外科、国立療養所岐阜病院外科、京都市立病院呼吸器科、市立舞鶴市民病院内科勤務を経て、2004年洛和会音羽病院副院長・洛和会京都医学教育センター所長。同年院長。2013年洛和会総長。2015年洛和会京都厚生学校長（兼務）。
国立がんセンター、沖縄県立中部病院、米国バファロー総合病院・コロラド州立大学病院で研修。1998年より京都大学医学部臨床教授。
主な編著訳書：『“大リーガー医”に学ぶ』（医学書院、2002年）。『Dr.ウィリス　ベッドサイド診断』（医学書院、2008年）。『地域医療は再生する』（医学書院、2010年）。

2017 団体助成セミナー（1）

第2回東京国際内視鏡ライブ（TOKYO Live 2017）

大会長／井上　晴洋（昭和大学江東豊洲病院消化器センター長）

日時：第1日目　2017年4月29日（土）
第2日目　2017年4月30日（日）
会場：昭和大学江東豊洲病院
主催：第2回東京国際内視鏡ライブ
後援：公益財団法人
日米医学医療交流財団

平成29年4月29日30日の2日間、当院講堂でTOKYO Live 2017を開催いたしました。

2回目となる今年のTOKYO Live 2017では、昨年よりも症例数を増やし、総計23例に対し、2日間にわたってライブデモンストレーションを行ないました。その内訳は、当センターが世界に発信するPOEM、ARMSをはじめ、食道、胃、十二指腸、大腸病変に対するESD。また、小腸病変を観察するシングルバルーンおよびダブルバルーン内視鏡、そして、胆膵病変に対するERCP、EUSと、幅広い領域をカバーし、アメリカ、ヨーロッパからのエキスパートによる最新の技術を、存分に供覧することができました。

昨年同様、すべて進行は英語で行なわれましたが、活発な討議も行なわれました。海外からの参加者71名を含む、225名の参加人数は、われわれの予想を超えるものであり、日本のみならず、アジアを代表するライブデモンストレーションとしての期待を、感じることができました。（事務局長・出口）

2017 団体助成セミナー（2）

ITヘルスケア学会 第11回学術大会

大会長／佐藤　智太郎（国立病院機構名古屋医療センター医療情報管理部長）

日時：第1日目　2017年5月27日（土）
第2日目　2017年5月28日（日）
会場：国立病院機構名古屋医療センター
附属看護助産学校
主催：ITヘルスケア学会
後援：愛知県／名古屋市
公益財団法人
日米医学医療交流財団

近年のIT技術の驚くべき進歩は、「クルマの自動運転」「人間より強い囲碁プログラム」「超高速で相場を読む金融システム」などを生みだしています。また、あちこちで起こる災害への対応や、増え続ける在宅医療のニーズにどのように応えるべきか、これからの日本をどうするか、ITと医療を軸にした活発な議論が期待されます。

このような環境の中、第11回学術大会では、全体テーマを「ITヘルスケアのこれから～在宅、災害対策からAIまで～」と設定し、「AI（人工知能）」「災害対策」「IoTとモバイル」「ビッグデータと行政」「セキュリティ」などについてのシンポジウムや「人工知能と認知症」の講演、「薬剤とIT」など、IT技術が人々の暮らしに大きな変化をもたらす可能性の高い演題を実施いたしました。また、学術大会の最後には、災害時の医療や自動運転技術の進歩について具体的事例を基にしたパネルディスカッションを市民公開講座として開催し、一般市民をはじめ、情報通信、情報工学、医療情報やその活用に関わる研究者や企業関係者にも多くご参加いただき、盛会裡に終了いたしました。（佐藤）

2017 団体助成セミナー（3）

第35回 日本肥満症治療学会学術集会

会長／佐々木　章（岩手医科大学医学部外科学講座教授）

日時：第1日目　2017年6月23日（金）
第2日目　2017年6月24日（土）
会場：アイーナ
（いわて県民情報交流センター）
主催：日本肥満症治療学会
後援：公益財団法人
日米医学医療交流財団

第35回日本肥満症治療学会学術集会テーマを、「Promising Evidence & Patient Care」とし開催いたしました。

一つのテーマである「Promising Evidence」では、日本から世界に向けて将来有望なエビデンスを発信できるように、日本人の肥満症治療を通じてわかってきた研究成果と治療法について、もう一つのテーマである「Patient Care」では、明日からの肥満症治療におけるチーム医療の向上と発展に寄与できる内容を多職種からご発表をいただき、活発な討論をいただきました。

わが国では、肥満症に対する基礎的・臨床的研究の一層の充実を図る日本肥満学会（JASSO）があります。一方で日本肥満症治療学会（JSTO）は、肥満症の治療を中心に、基礎的・臨床的な研究と討議から科学的で適切な治療指針を見出し、有効かつ安全な肥満治療、合併症予防と健康回復に寄与することを目的としています。両学会の連携は重要と考えています。「Promising Evidence」はJASSOを、そして「Patient Care」はJSTOを意識し、両学会の融合の願いも込めてこのテーマにしました。

演題を公募した結果、総演題数169題（講演・上級演題79題、一般演題90題）と過去最多のご応募をいただくことができました。また、JSTOとしては初めてJASSO/JSTO Joint Symposium（これからの医療における肥満症の位置づけ）を企画でき、嬉しく思っています。

約350名と多くの参加者が盛岡にお越しいただけたこと、また、総会と共に開催した市民公開講座にも150名を超える盛岡市近郊の方々にお集まりいただくことができました。あらためて御礼申し上げます。（佐々木）

2017 団体助成セミナー（4）

第17回呼吸療法セミナー in 湘南2017

大会長／渡部　和巨（米国呼吸療法学会国際部会日本責任者、東京西徳洲会病院院長）

日時：第1日目　2017年7月15日（土）
第2日目　2017年7月16日（日）
会場：湘南藤沢徳洲会病院
主催：日本医工学治療学会呼吸器分科会
後援：公益財団法人
日米医学医療交流財団
特定非営利活動法人
日本呼吸ケアネットワーク

米国よりLonny Ashworth教授を招聘し、米国の呼吸療法士が受けている実践的教育の提供と、認定士の質向上を目的に始めたこのセミナーも今回で17回目です。

この会は2006年からNational Board for Respiratory Care（NBRC）に認定されています。日本でも呼吸ケアチーム加算が付き、看護協会認定慢性呼吸器疾患看護が認定看護師の一つに加わり、2013年の1月に行なわれた慢性呼吸器疾患認定審査を経て60名弱の認定看護師が誕生し、毎年約60名ずつ増えています。関係医学会6学会（日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔科学会、日本呼吸療法医学会、日本集中治療医学会、日本生体医工学会）が後援し、「呼吸療法専門臨床工学技士認定制度」が2012年にスタートしました。

3学会合同呼吸療法認定士は1996年に始まり2017年9月の時点で4万3,463人の合格者がいます。日本呼吸ケア・リハビリテーション学会は新しい制度として呼吸ケア指導士制度という資格を医師、歯科医師、看護師、准看護師、理学療法士、作業療法士、栄養士・管理栄養士、薬剤師、放射線技師、言語聴覚士、臨床工学士、臨床検査技師、介護福祉士、その他の呼吸ケア領域で専門職種として活動できる立場の人を対象に導入し、初級・中級・上級コースを設けてスキルアップを図れるようにしています。

さて、このたび日本呼吸ケア・リハビリテーション学会とAARC（American Association for Respiratory Care）との間で提携が結ばれたことをもちまして、本会を閉じることになりました。長きにわたりご厚情をいただきました関係者の皆様に衷心より感謝申し上げます。（渡部）

2017 団体助成セミナー（5）

第30回日本サイコオンコロジー学会総会 第23回日本臨床死生学会総会

大会長／大西　秀樹（埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科教授）

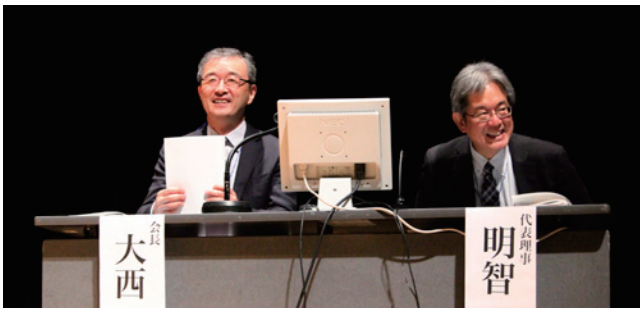
日時：第1日目　2017年10月14日（土）
　　第2日目　2017年10月15日（日）
会場：きゅりあん（品川区立総合区民会館）
主催：日本サイコオンコロジー学会
　　日本臨床死生学会
後援：公益財団法人
　　日米医学医療交流財団

サイコオンコロジーの専門家と死生学の専門家が共に集まって議論することで多くの新しい知見が生まれることを期待し、また、両学会の研究課題でもある生と死の問題に正面から取り組むため、今回のテーマは「死までの生を生きる」とした。

また、サイコオンコロジー、死生学にはじめて触れる方々にも基本的なことを学んでいただけるようなプログラムも準備した。プログラム内容は次のとおりである。

会長講演「死までの生を生きる」、特別講演（4題；樋口恵子、國森康弘、田村恵子、久保田陽介各氏）、招待講演（保坂隆氏）、シンポジウム（13題）、事例検討（8題）、セミナー（5題）、市民公開講座「いまを生きる」（コシノジュンコ氏）、一般口演（日本臨床死生学会）、ポスター発表（日本サイコオンコロジー学会）、大会企画「Gifts from the SORA」、「女性のキャリアパスサロン」など。

本総会での各種講演や研究発表、討論が、精神腫瘍学および臨床死生学の今後の発展に大きく寄与するものと確信している。2日間で1,713名もの参加をいただき、盛会裡に終了した。（大西）



2017 団体助成セミナー（6）

第7回日本在宅看護学会学術集会

大会長／佐藤　悦子（山梨県立大学看護学部看護学科教授）

日時：第1日目　2017年11月25日（土）
　　第2日目　2017年11月26日（日）
会場：山梨県立大学看護学部
　　池田キャンパス
主催：一般社団法人日本在宅看護学会
後援：公益財団法人
　　日米医学医療交流財団

2日間とも天候に恵まれ、大きなトラブルもなく無事終了した。大会のテーマ「在宅看護の原点、そしてさらなる挑戦～実践・研究・教育の場からの発信～」のもと、一般演題92題が集まった。参加者は700名を超えた。どの会場も熱気に溢れ、活発な意見交換が和やかな雰囲気の中で行なわれた。参加者間の交流も活発に行なわれ、プログラム内のみならず、在宅看護・地域看護専門看護師や新卒訪問看護師たちの交流会がプログラム終了後に自主的にもたれるなど、本学会が積極的な情報交換の場となっていた。

大会を運営するにあたり、企画委員15名、準備委員29名、当日の実行委員23名と学生ボランティア62名の交流も図れ、訪問看護師や行政保健師、病院看護師とのネットワーク化もさらに深まった。また、参加者からは「運営スタッフが素晴らしく、きめ細やかな配慮、準備など徹底していたと思う」「元気・パワーをもらった2日間だった」「毎年興味深い内容になり参加が楽しみ」などという意見も聞かれ、全体的な運営もほぼ問題なくできたと考える。

本大会が山梨県内で開催されたことにより、在宅看護の質をさらに高めたいという県内の気運がより一層高まりました。このような機会をいただけましたことに心より深く感謝申し上げます。（佐藤）

2017 団体助成セミナー（7）

AGING Japan 認知症研究会

日時：2017年12月2日（土）
会場：TKP渋谷カンファレンスセンター
カンファレンスルーム8A
主催：一般社団法人
日本次世代型先進高齢社会研究機構
後援：公益財団法人
日米医学医療交流財団

代表理事／阿久津　靖子（一般社団法人日本次世代型先進高齢社会研究機構）

テーマは「認知症のスクリーニングと予防について」Joe Verghese 氏の臨床に基づく講演であった。Verghese 氏は画像を使用した、および歩く速度によるスクリーニングを実施している。認知症スクリーニングの多くは言語によるものが多く、本人の教育レベルや言語文化によって差違が出る。そこで、安くて、簡易で誰でもが行なうことのできる画像を使用した認知症スクリーニングを考案。17カ国22箇所2万6,802人の患者に実施しており、実際にスクリーニングの成果が出ている。一方、歩行速度と認知症との関連性についての研究発表をされた。また、認知症予防と生活習慣との関連性も発表された。MCI（軽度認知障害）はMCR（運動認知リスク症候群）に関連づけられ、社会活動や認知楽しい活動がMCR（運動認知リスク症候群）リスク軽減に繋がることが紐付けられている。

また、ダンスをする、リズム太鼓プラクティスを行なう、何もしない高齢者を比較した場合にはダンスをした場合がMCI 改善に繋がることが検証されている。

プレゼン後、参加した医療関係者や認知症に興味のあるエンジニアとのやりとりも非常に活発に行なわれた。今後も引き続き一般社団法人日本次世代型先進高齢社会研究機構として研究などの交流をはかっていきたい。（阿久津）

2017 団体助成セミナー（8）

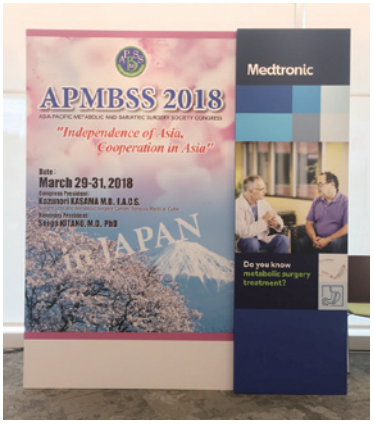
アジア太平洋肥満代謝外科学会総会（APMBSS 2018）

日時：2018年3月29日（木）～ 31日（日）
会場：東京ガーデンテラス紀尾井町
紀尾井カンファレンス
主催：アジア太平洋肥満代謝外科学会
後援：公益財団法人
日米医学医療交流財団

会長／笠間　和典（四谷メディカルキューブ減量糖尿病外科センター）

アジア太平洋肥満代謝外科学会総会（以下、APMBSS 2018）は『Independence of Asia、Cooperation in Asia』をテーマとしました。昨今、肥満に関しては欧米だけでなく、アジアからも多くのエビデンスが報告されています。世界中の糖尿病患者の60パーセントがいるアジアで、多くのエビデンスを発信するために、様々なセッションを3日間かけて行ない、多くの議論が飛び交いました。

シンポジウム３のNational Reportsでは、18カ国の国を代表する医師が各国の症例数等の統計を共有し、今後はこのアジア太平洋地域の統計を論文として発表することも検討しています。



肥満外科治療は日本国内ではまだ認知度が上がっていない治療ですが、海外ではすでに広く普及しています。今回、アジアを中心とした21カ国から約350名の参加がありました。（笠間）

JANAMEF news Vol. 50

JANAMEFフェローレポート

2018年日本版ホスピタリスト助成者壮行会

日時：2018年4月21日（土）18:30〜21:00
場所：東京ガーデンパレス「鶴」

2018年4月21日（土）前期選考委員会が開催され、2018年度助成者5名が決定しました。JANAMEFが「日本版ホスピタリスト*の育成」のための助成に舵取りした第1期生となり、大いなる期待を持って送り出したいと、5月24日には壮行会を開催いたしました。

＊米国におけるホスピタリストとは「入院患者に対して、特定の臓器や疾患の診療にとどまらず、包括的な医療を提供し、病院及び医療システムのパフォーマンス向上、価値の高い医療の提供に尽力する」医師を示す。特に日本の制度、システムの中に適応させたものを日本版ホスピタリストと称することとする。

栗原　健
日本医科大学医学部卒、浦添総合病院後期研修医
研修先：University of Michigan
分　野：米国におけるホスピタリストの役割を学ぶ

園田　健人
防衛医科大学校医学科卒、陸上自衛隊北方衛生隊内科医官
研修先：University of Pittsburgh Medical Center, Shadyside
分　野：家庭医療

三高　隼人
長崎大学医学部卒
練馬光が丘病院総合診療科後期研修医
研修先：Mount Sinai Beth Israel
分　野：総合内科

竹内　ありさ
琉球大学医学部卒
地域医療振興協会地域医療センター内科後期研修医
研修先：Oregon Health & Science University
分　野：家庭医療

橋本　知直
東海大学医学部卒
手稲渓仁会病院総合内科・感染症科医員
研修先：University Hospitals Cleveland Medical Center
分　野：家庭医療

吉田　敬普
東京医科歯科大学医学部卒、洛和会音羽病院総合内科医員
研修先：Oregon Health & Science University
分　野：総合内科

沖縄からスカイプで開会挨拶をする
黒川清JANAMEF会長

閉会後、エールを交換し合う三氏
（左から三高・栗原・園田氏）

助成選考結果について報告する
小池薫選考委員長・JANAMEF理事

助成証書の授与（左は栗原健氏）

記念撮影（左は園田健人氏）

助成者による返礼と決意表明（三高隼人氏）

助成者を囲んで

JANAMEFフェローレポート

今後もカナダから日本の医療のために発信

佐藤　敬太

研修先：Department of Anesthesia & Perioperative Medicine,
Schulich School of Medicine & Dentistry, Western University
期　間：2016年7月～2018年6月

カナダ、オンタリオ州にありますWestern UniversityでClinical Fellow（Cardiac Anesthesia）として2年間働きました。

予想だにしていなかったことですが、Fellowship終了後、スタッフとして残らないかと誘ってもらいました。難しい決断でしたが、この2年間楽しく過ごせましたのでカナダに残って頑張っていく決断をしました。

海外留学に関する多くの情報がインターネットを通じて容易に手に入る今でも、海外で生活する、臨床をするということは大変で、英語の問題、文化の違いに触れることは大いに人生観を変えるきっかけになりました。情報があまりなかった時代に、留学を経験された多くの先輩方の苦労とエナジーにはただただ感銘するばかりです。

日本と北米で大して臨床の点で違いはないから留学する意味はない、と主張することもできますし、日本はまだまだ遅れていて、彼らから学ばなければならないと言うこともできます。凡庸ではありますが、私はどちらも正しいと感じています。

日本での経験、麻酔、経食道心エコーの技術を高く評価してもらったことは、日本の臨床のレベルの高さを示していると思います。一方で、英語を母国語とするアドバンテージがあるとはいえ、Western Universityの麻酔科からはJAMAやLancetなどの一流ジャーナルに研究を発表しています。研究への熱は非常に高く、またそのためのシステムを有しています。その点でまだ吸収できることがあるのではないかと考え、カナダでやっていくことにしました。

この7月からはCardiac AnesthesiaのAssistant Professorとして働きます。またDepartmentのサポートを得てPart-timeでUniversity of OxfordのMedical StatisticsのMaster Degree Course（大学院）で勉強もしていきます。

今回の留学に関してJANAMEF会員の皆様のご支援に感謝申しあげます。またClinical Fellow、Assistant Professorでの採用の双方で推薦、ご助言をいただいた東京女子医科大学麻酔科学教室、野村実先生、尾崎眞先生、大変ありがとうございました。今後もカナダから日本の医療のために何か発信できればと考えています。

同期のFellowたちと
――筆者右端

私たちは、JANAMEFを応援します

Donation

2017年4月1日より2018年3月31日までにご支援くださった寄附者・賛助会員は以下の方々です。厚くお礼を申し上げます。医学医療の国際交流支援のため有効に使わせていただきます。（50音順・敬称略）

JANAMEFの事業を応援いただいた団体寄附者・団体賛助会員一覧

5口（50万円）以上・ご寄附

東京医科大学

橋本市民病院

2口（20万円）以上・ご寄附

（株）クリニカルパス

（株）シェーンコーポレーション

昭和大学

三田商事（株）

（医社）洛和会

1口（10万円）・ご寄附

愛知医科大学

（一社）ITヘルスケア学会

足利赤十字病院

池野医院

（株）エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所

（学）大阪医科薬科大学大阪医科大学

大阪紙業（株）

（株）大塚製薬工場

海外医科大学事務局

（医社）かとう内科並木通り診療所

（株）カナミックネットワーク

（学）関西医科大学

（株）京都科学

（株）GLNEC

（株）啓愛義肢材料販売所

慶應義塾大学医学部

（社医）厚生会木沢記念病院

（医）コスモス会コスモス在宅クリニック

（医）埼玉愛育会太田マタニティクリニック

（学）埼玉医科大学

サクラグローバルホールディング（株）

サクラ精機（株）

サクラファインテックジャパン（株）

（学）慈恵大学

（医社）至高会たかせクリニック

（株）シニアホーム相談センター

（社医）ジャパンメディカルアライアンス

（医社）秀仁会

（有）獣徳会

昭和電工（株）

（社医）仁愛会　浦添総合病院

（医社）成和会西新井病院

泉工医科工業（株）

大正富山医薬品（株）

（株）ツムラ

（社医）天神会

東急ウェルネス（株）

（学）東京女子医科大学

東洋リネンサプライ（株）

（株）トラベルパートナーズ

ニプロ（株）長野営業所

（公社）日本看護協会

（公社）日本薬剤師会

（一社）日本臨床衛生検査技師会

（株）パソナ

（有）ビッグレッドファーム

（株）フジコーポレーション

丸文通商（株）

メドピア（株）

（株）ヤマウラ　佐久支店

国立大学法人山形大学医学部

（学）ヤマザキ学園

（社医）黎明会

JANAMEFの事業を応援いただいた個人寄附者・個人賛助会員一覧

2口（4万円）以上・ご寄附

饗場　庄一
石河　正樹
伊藤　信彦
今泉　　勲
今津　博雄
宇田　左近
大瀧　守彦
小川　徹也
加瀬　純子
小山　　勇
清水　一功
髙本　眞一
鳥羽　　董
豊野　学朋
鍋谷　欣市
橋本　正良
福田　　誠
松村　理司
松山　康久
三嶋　道子
渡辺　洋一

1口（2万円）以上・ご寄附

青木久仁男
赤尾　弘志
赤津　晴子
秋山　　徹
浅井　浩司
朝海　直子
浅野　広視
芦田　ルリ
新井　英介
李　　相一
飯島　　治
池田　尚敬
池田　俊也
石川美津子
石黒　　洋
石坂　信和
石塚　万貴
泉　　美貴
井田　真司
井手　義雄
井樋　栄二
伊藤　彰洋
伊藤　拓緯
伊藤　研悠
稲田　清英
稲葉　博隆
井上　大輔
井上　信明
井上　　祥
岩井千賀子
上塚　芳郎
上原　由紀
牛屋　重人
内野三菜子
内堀　臣規
梅津　亮二
遠藤　直哉
大國　義弘
大田　明英
大嶽　浩司
大塚　教子
大坪　　修
大西　由華
大沼　　哲
岡嶋　　馨
奥村　憲二
小澤　悠里
織田　　豊
織田　弘美
越智　小枝
落合　武徳
落合　高徳
小幡　一夫
海法　　悠
香川　敏之
鍵本　伸二
笠原　健一
片岡　仁美
加藤　　壯
加藤　直子
金澤　香里
金谷恵理子
加納　宣康
紙谷　　聡
神谷　　亨
河瀬　　勇
神尾　明君
岸本　暢将
清原　義徳
楠本　勝美
工藤　大介
栗原　　敏
黒川　　清
黒木　春郎
小池　　薫
小島　誠人
小園　明憲
小平　　進
小玉　正智
小林　祥泰
小林　恵一
呉屋　朝幸
湖山　泰成
齋木　佳克
西城　卓也
齋藤アンネ優子
佐伯　俊昭
阪井　裕一
坂部　　貢
佐々木博正
佐々本研二
佐藤　敬太
佐野久里子
塩川　　恵
司馬　清輝
嶋田　正文
清水　　豊
釋尾　知春
庄嶋　健作
白井　敬祐
塩飽　哲生
末廣晃太郎
鈴木　康之
関　　一平
園田　健人
髙倉　公朋
髙嶌　恒男
髙橋　　力
高橋しづこ
瀧波　將典
竹下　克志
武田慧太郎
竹中　　洋
立川　幸治
田中　創始
長　　和彦
津久井宏行
土橋　信明
恒吉　裕史
天白　泰司
徳田　安春
友納　康二
外山　　宏
鳥井　晋造
永井　　徹
長岡　武彦
中川　　洋
長坂健二郎
中島　康雄
中村　知夫
中村　尚生
新津　健裕
錦見　尚道
西崎　　彰
西田　　謙
西中　一幸
西村　　基
野村　　理
野村　祐之
野村　　実
野村　岳志
橋本　一樹
服部満美子
伴　信太郎
疋田　　賢
久持　邦和
兵庫　秀幸
平野　悌志
平山　　登
平山　勝代
福島　俊譽
福永　直人
藤澤　邦見
二木　良夫
船本　成輝
古屋　一裕
堀　　義生
堀内　　優
本田　俊雄
前田　　盛
牧野　治郎
松永　　保
松本　理器
丸山　　徹
三浦　眞澄
水野　智美
宮坂　勝之
宮地　麻衣
宮下　　智
村山　忠弘
甕　　昭男
盛　　直博
森　　保彦
森　　宣
森田　紗枝
師田　信人
柳　　秀高
山内　正憲
山田　雅晶
山本　　悟
山本　賢司
山本　貴道
吉岡　哲也
依田　晋一
涌田　博道
真鍋　俊明
渡辺　良子
渡邉　直子
（匿名希望）

ご寄附、賛助会費のお願い

本財団の事業は、各位の絶大なご厚情・ご協力に支えられており、皆様のご支援なくしては所期の目的を達成できません。本財団は2012年8月に公益財団法人に移行し、ご寄附及び賛助会費に対しては免税措置が講じられますので、なにとぞ格段のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

Medical English

小林恵一先生の医療英会話　シリーズ第13回

アメリカでは偉い人ほどFriendly

アメリカ横須賀海軍で研修していた時の話です。大きな基地で、こんな大きな施設を責任持っている司令官は一体、どこにいるのだろう。さぞかし、地下のセキュリティの高い厳重な防御壁の内にいて、普通ではまず、会えない存在なのだろうなと想像していました。ところが衛生兵に聞くと、「司令官ですか？　夕方、PX（海軍のスーパーマーケット）に行ってごらんなさい。だいたいいつもショッピングカートを押しながら夕食の材料を買っています。声をかけるとHiって手を振ってくれますから」。

アメリカの文化の一つに、高い地位にある人間が威張るのはみっともない、という感覚があります。ちょっと偉くなると、すぐに威張るような状態をCockyと言います。

例：You copy bustard.
　　Quit acting like you’ re the man

アメリカでは偉い人ほどFriendlyに振舞います。皆さんがアメリカの大統領に個人的にお会いする機会があれば、極めて率直、親しみやすく、親切なのに驚くでしょう。Cockyだと思われるような人間は過酷なアメリカの大統領選を勝ち抜けません。現職のトランプさんも、その前のオバマさんも皆、この点では変わりません。

“偉い人”で思い出しましたが、ジョン・マケイン上院議員死去のニュースが全世界を駆け巡りました。このマケインさんほど、強烈な反骨精神の持ち主はいないでしょう。

よい家庭の出身です。お祖父さんもお父さんも、海軍提督、自身もアナポリス海軍兵学校へ行きました。ところが、無茶な上級生や上官に反発し、不従順の烙印を押され、兵学校をほとんどビリで卒業。ここら辺から、面白い人だということが明確になってきます。ベトナム戦争の時は操縦していた飛行機を撃ち落とされ、北ベトナムで捕虜となりました。北ベトナムは重傷のマケインを治療せず、放置していましたが、やがて父親がアメリカ海軍のベトナム戦争の最高責任者であると分かり、捕虜交換で釈放しようとします。ところがマケインは、「それは筋が違う。FIRST IN, FIRST OUT（すなわち先に捕虜になった者から釈放されるべき）だ」と主張し、釈放を拒否。自分より長く捕虜になっている戦友を自分のかわりに釈放するように要求。この時点ではベトナム戦争は終結の糸口がまるで見えず、一生捕虜収容所で過ごす覚悟でマケインは主張したのです。

また、反アメリカの宣伝に加担するようベトナム軍に要求されたのを拒否、繰返し拷問を受けるも、頑として動じませんでした。その結果、右手に麻痺が残ってしまいました。かなりの根性の持ち主ということがお分かりになるでしょう。アメリカの白人の中に時々いるタイプです。

捕虜釈放後、政治家になり、自分を拷問したベトナムとアメリカの国交回復に努力しています。また、こんなこともありました。ブッシュ大統領のもとテロ容疑者への拷問がなされた時にまっさきに反対し、アメリカだけはそんなことをしてはいけないと主張。日本にもこのぐらい根性のある政治家がほしいものです。マケインさんでも大統領になれませんでした。アメリカの政治家の層は厚い。

小林　恵一（こばやし・けいいち）
ハワイ 聖ルカ・クリニック院長、
神戸大学医学部臨床教授
公益財団法人日米医学医療交流財団評議員／
JANAMEF Fellow
1980年東京大学文学部西洋史学科卒業、1988年神戸大学医学部卒業。1990〜93年南カリフォルニア大学ハンティントン記念病院内科レジデント、ハワイ大学内科レジデント。東京八王子東京天使病院内科部長、御代田中央記念病院副院長を経て、1997年米国ハワイ州ホノルルにて開業。2014年より財団（JANAMEF）評議員。

事務局だより Activities

30周年記念式典開催のお知らせ

当財団は1988年10月25日に設立され、特定の企業や団体を背景にしない公益の志を持った医師の活動がこれまで評価されてきました。おかげさまで本年10月をもちまして、30周年を迎えることができます。これもひとえに会員の皆様方のご支援によるものです。感謝の意を込め記念の催しを執り行ないたいと存じます。会員の皆様には、仔細が決まり次第、別途ご案内申し上げます。よろしくお願いいたします。

日時：2019年2月3日（日）
16:00 ～ 17:50　第1部　記念式典
18:00 ～ 19:30　第2部　記念祝賀会
会場：国際文化会館
東京都港区六本木5-11-16
TEL 03-3470-4611

財団30年の歩み

1982年	「財団設立準備委員会」による活動開始
1988年10月25日	日米医学医療交流財団設立（草川三治会長、本多憲児理事長）
1992年	**医師助成者100名を数える**
1993年10月	設立5周年記念祝賀会をおこなう
同年	基本財産の多額の喪失、財団存続の危機に見舞われる
1994年	徳田虎雄氏の寄付により基本財産を回復
1998年	**医師助成者200名を数える**
1999年11月	設立10周年記念式典をおこなう
2005年	**医師助成者400名を数える（歯科医師、薬剤師、看護師を合わせると助成者は500名を超えた）**
2008年	設立20周年記念式典をおこなう
2011年	**医師・歯科医師・薬剤師・看護師の助成者が600名を超える**
2012年7月	公益財団法人に移行（8月1日設立登記）
2013年	設立25周年記念式典をおこなう

25周年の記念講演をいただいた故日野原重明先生と赤津晴子先生。左端は来賓のフルブライト・ジャパン前事務局長デビッド・サターホワイト氏（2013年7月20日）

平成30年度 事業計画書 （2018年4月1日～2019年3月31日）

収支環境が厳しさを増す中で、安定した財源の確保を図りつつ、公益法人として着実に事業を実施する。また、中長期的な視点に立って、本財団の目的に合致し、本財団が実施するにふさわしい事業の展開を推進する。

事業内容

1．賛助会員・寄附の募集について

本財団の基幹的な収入である賛助会費・寄附金の目標額を定め、賛助会員・寄附の募集活動を積極的に推進する。2017年度にタスクフォースによる集中検討の結果、助成事業の軸足を日本版ホスピタリスト育成に舵を切った。今年度はその基本方針に沿って日本版ホスピタリスト助成の周知及びネットワークづくりに注力し、また併せて民間企業への周知を行ない、賛助会員の拡大、寄付の拡大を図る。2018年10月に財団設立30周年を迎えるにあたり、日本版ホスピタリストの定着に向けたイベントを行なう。またJANAMEFフェローのデータベースの整備を進めるとともに、臨床教育プロジェクトを推進し、支援者の裾野の拡大を図る。

2．助成事業について

医療関係者の留学助成事業は本財団の中心的な事業であり、グローバル化が進展していく中で国際的な架け橋となり、国際的人材の育成に貢献していく。日本版ホスピタリストの育成に向けて10年間、年間1,000万円、総額1億円を、財団の基本資産を取り崩して助成に適用することが、2017年11月の評議員会において審議・可決され、正式決定されている。

以下、4件の個人助成（1～4）と、1件の団体助成（5）を行なっていく。

（1）日本版ホスピタリスト育成事業
（2）環太平洋アジアファンドによるアジアの医療関係者の日本における医学医療研修助成
（3）アメリカ短期看護研修
（4）医学部夏期集中医学英語研修
（5）本財団の目的に合致し、助成に値すると認めた学会・団体に対する助成や後援を行なう

- 4月27日（金）～ 29日（日）
第3回東京国際内視鏡ライブ（東京ライブ）（東京）
- 6月2日（土）～ 3日（日）
第12回 ITヘルスケア学会学術大会（神奈川）
- 6月15日（土）～ 16日（日）
第36回日本肥満症治療学会学術集会（東京）
- 8月24日（金）～ 26日（日）
第28回日本外来小児科学会年次集会（東京）
- 10月27日（土）～ 28日（日）
第1回東京メトロポリタン国際内視鏡ライブ2018（東京）
- 11月10日（土）
第24回日本最小侵襲整形外科学会（愛知）

3．医学医療の国際交流の促進及び普及啓発事業について

医学医療の国際交流促進による国民の保健・医療・福祉の向上に寄与するため、時宜に適ったテーマを掲げセミナー及びシンポジウム等を開催する。

また、広報活動を活発化する。

（1）セミナー等開催計画
① 主に医師、看護職、医療系学部生等を対象とした医学医療交流セミナー（年1回）
② 一般を対象としたJANAMEFセミナー・シンポジウム（年1回）
③ 財団設立30周年に関するイベント

（2）広報活動
① ホームページの内容の充実を図り、財団の事業内容を適切に案内するとともに、JANAMEFフェローの声や財団の活動状況を積極的に紹介する
② JANAMEF NEWSを発行する（年2回）
③ 各学会・関係雑誌・メディア・留学支援団体等へのコンタクト構築

4．支援事業について

国・地方自治体等の公共的な機関からの依頼に基づき、政策課題に対応するため医学医療研修者の派遣・招聘事業の支援及び医学医療に関する調査・研究事業の支援を行なう。